

## 中国のマクロ経済変数の DGP と構造変化

福岡女子大学 張 艶

1978年の経済改革後、中国は計画経済から市場経済に転換しつつある。特に、1990年代に入ってから市場経済化が本格的に進み、金融面においても、金融政策の中間目標の転換、金融政策の変更や金融システム改革などが実施された。このように、90年代以降、中国のマクロ経済の環境は大きく変化し、マクロ経済変数のDGP(Data Generation Process)に構造変化が生じた可能性がある。

時系列データの分析では、まず単位根検定を行うことにより、データの定常性を検証することは、不可欠な手順となっている。しかし、中国の先行研究の多くは、データのDGPについて詳細な検討を行っておらず、構造変化の有無を検証していない。本報告の目的は、中国のマクロ経済時系列データについて、単位根検定を通じてDGP及び構造変化を分析し、それにより政策分析の出発点を与えることにある。

分析の手順は以下のとおりである。まず、中国の金融変数・実体経済変数の時系列データについて、ADF 検定と PP 検定により単位根が存在するという帰無仮説を検証する。そして、ADF 検定と PP 検定により帰無仮説が棄却されない変数について、Perron[1997]等の方法により構造変化の有無を検証する。

対象変数は1983年1月以降利用可能な月次データである。金融変数としては、貸出金利、預金金利、M1、M2などを使用する。実体経済の変数としては、実質輸出、実質輸入、実質工業総生産、実質固定資産投資、実質社会商品小売総額などを使用する。

分析の結果、金融政策の変更、金融政策の中間目標の転換などから、金融変数のDGPに構造変化が生じている可能性があることが分かった。